三重大生物資源紀要
第9号：37～48
平成5年1月29日

農業にとびこむ人たち

――新規参入農業者の生活と農業観――

秋　津　元　輝
三重大学生物資源学部

Entering the World of Agriculture

――The Lives of New Farmers and Their Views of Agriculture――

Motoki AKITSU
Faculty of Bioresources, Mie University

Abstract

The number of those taking over the family business of farming has dropped drastically these days in Japan. From now, the new farmers have made their appearance and have no farm assets at the beginning. This article intends to clarify such new farmers' lifestyles and views regarding agriculture, though most of the former research has tended to see them as supply of agricultural labor force; new farmers' novel thoughts and lifestyles could stimulate the traditional agricultural world to rethink its fixed idea.

Several common characteristics resulted from intensive interviews with seven new farmers, although most of them are 'life-oriented', that is, not 'business-oriented'. The main findings are as follows.

First, they want to completely control all aspects of business and life. They not only produce agricultural products but sell them. They of course produce their own food, in fact one of them has made his own home.

Second, they are more personal rather than belonging to social groups. A few them sell products to their friends and acquaintances associated with their previous job.

Third, they do not want to get involved with any social movement or things of that sort. This might be the greatest difference between the new farmers in 70's and those entering this field of work now.

Key words: New farmer・View of agriculture・Agricultural life

1　は　じ　め　に

自家農業後継者の減少が騒がれ始めてひさしい。平成2（1990）年には，農家子弟の新規学卒就農者が1,800人，いわゆるUターン青年（農家世帯員のうち卒業後いったん他産業に就職した後離職し「農業が主」となった者のうち34歳以下の者）が1,900人であった。5年前の昭和60（1985）年の数字はそれぞれ，4,800人，

平成4年7月11日　受理

12,600人であったから，その激減のようすが知られよう[注1)]。専業的な農業労働力の参入は，この他にも定年後農業に就業するなどのパターンもあるが，総じて農業労働力は減少傾向にあり，今のところその傾向は続きそうである。

こうした農業労働力の減少傾向のなかで，徐々にではあるがしだいに注目を集めつつあるのが，非農家出身者を中心とする農業への新規参入者たちである。『農業白書』では，すでに10年ほど前から新規参入者に関する記述がみられる。また，1987年には全国農業会議所や都道府県農業会議の手によって，新規就農ガイドセンターなどの相談機関が設けられ，新規参入希望者に対する就農地等の斡旋がおこなわれ始めた。さらに，1992年6月10日農水省発表の『新しい食料・農業・農村政策の方向』のなかにも，新規参入者を強く意識した支援措置が盛り込まれている[注2)]。一方，受け入れる側の農山村としても，高齢化などによって作り手のない農地が現れ出すという情況があり，人口減少に歯止めをかけたいという願いも含めて，新規参入者を受け入れる雰囲気になってきた。

このように新規参入農業者たちにとってしだいに追風が吹きつつはあるが，次節で示すように，その数は減少しつつある自家農業後継者数と比較しても，やはりほんの少数派にすぎない。しかし，少数派であるとはいえ，親から譲り受ける農地もないなかで，皆が敬遠するような農業の世界にとびこむ人たちの生き方や考え方は，今後の農業の進路を考えるうえで重要であるし，受け入れる農村側に対しては，その異質な存在のゆえに伝統的社会を変革するひとつの源になるという可能性を秘めている。

この視角は，広義には農業経営の主体的側面を重視する経営者能力論のなかに位置づけられよう。たとえば田口三樹夫[10)]は，現実の経営力を，経営者の抱く「経営理念（農業観）」[注3)]とそれによって規定される「行動様式」とに区分して把握しようとする。この枠組みに沿っていえば，小稿の関心はとくに前者の「経営理念（農業観）」について，その概念を拡張しつつ，それを農業経営者の生活態度と不可分のものとして捉え直すところにある。

他方，1980年代後半以降，いわゆる環境問題が公害問題とは異なる様相で現われてきており，それに並行して，農業生産者の側にも農業への眼差しに関する革新が広がりはじめた。そうした新しい眼差しの特徴を実証的に明らかにする試みもすでにみられるが[注4)]，むしろそれは，この時期にあえて農業を始めようとする新規参入農業者において典型的に現われるといえよう。新規参入者に関する既存の研究が，農業労働力の補充という「担い手論」的観点に主関心をおいていることへの反省[注5)]の意味も込めて，農業への新しい眼差しを新規参入農業者のなかに探りたい。

具体的には，新規参入者へのインタビューを通じて，選択した農業という職業を彼らがどのように考えているのか，さらにそうした農業への眼差し，すなわち農業観[注6)]がどのような生活態度や生計実態に支えられているのか，について考察する。兵庫県と香川県で就農する7人の新規参入者を事例にあげて検討するが，その前に次節において，既存調査を利用しながら新規参入農業者の概要を述べておきたい。

2 増えつつある「生活志向」型新規参入者

概要を述べるに先だち，まず，農業への新規参入者の定義を考えておこう。新規参入を広く考えれば次のようないくつかの場合が考えられる[注7)]。

①非農家出身者が開業地に新たに農業基盤を築き農業経営を開始する場合
②農家出身者だが，分家などによって既存農業経営の継承を受けることなく新たに農業基盤を築き農業経営を開始する場合
③既存の農家へ婿入り・嫁入り・夫婦養子に入る場合
④農家・農業法人へ被傭される場合
⑤収入の基盤は他の職業におきつつ，自給自足的農業を新たに始める場合

このうち新規参入農業者として通常思い浮かぶのは①②である。後に利用する農水省調査の対象，および，新規就農ガイドセンターがおもに考えているのもこの①②の場合である。①②の場合は，既存の農業基盤をもたない状態で，しかも独立した農業基盤を築く必要があるので，政策的な支援がもっとも必要とされる部分であり，しかも政策的に関与しやすい部分であるといえよう。しかし，純粋に「担い手論」的な観点からいえば，農家の跡取り以外の農業労働力の参入が問題となるので，①②

③④が対象となる。また，新規参入者の生き方や考え方を問題にする立場をも認めるならば，⑤のような場合も視野に含む必要がある。農業で生計を立てるかどうかに違いはあっても，農業をみる眼差しに大差ない場合があると考えられるからである。

本来ならば①から⑤までのそれぞれの場合をとりあげるべきだが，既存の統計を利用する都合上，概要について述べうるのは施策対象でもある①②の場合のみである。この①②は，農業という職業に基盤もなく新規に参入するという意味で，新規参入者の核心をなすことは確かであり，中心的な傾向を捉えるには有効である。利用する調査は，農水省が1988年から89年にかけて①②の場合の新規参入者を対象としておこなった調査[14]であり，そのなかから参入者数や経営作目，就農動機などの現状と傾向について考察したい。

この調査（さしあたり「今回調査」と呼ぶ）は，1985年1月以降に新規参入し，1988年12月現在営農を継続している者240人を対象としているが，設問によっては，1980年から1985年9月までに新規参入した295人を対象にした調査（「前回調査」と呼ぶ）の結果も載せられており，短い間隔ではあるが傾向を読みとることができる。

まず年次別の新規参入者数については図1のとおりである。各年次にみられる前回調査と今回調査の差は，離農者の数を表わしている（ただし，1985年は調査月の関係上，今回調査の方が多くなっている）。これによると1980年から88年の間，総数466名の新規参入者が農業者として今のところ根付いていることになる。年平均にすると52名である。年次別にみると1984年に一度ピークがある。近年になって再び増加傾向にあるのは，1987年に発足した新規就農ガイド事業による影響もあるかも知れない。

図2は主たる作目について前回調査と今回調査の結果を示したものである。図注にあげたとおり各調査の回答方法が異なるので単純に比較はできないが，全体として畜産が減少傾向にあり[注8]，稲をはじめとする穀類やとくに露地野菜の伸びが顕著にみられる。施設野菜も増加しており，全般的に野菜作への参入は増加傾向にあるといえる。露地野菜については，長野県などに入植し新たに高冷地野菜の経営を始める事例もみられるが，有機無農薬による野菜栽培を選ぶ人たちの増加によるところも大きいと考えられる。

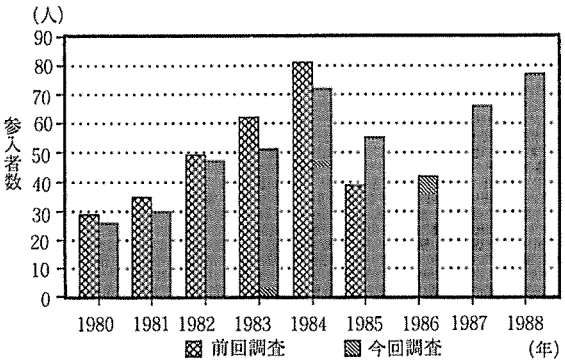

図1　年次別新規参入農業者数
資料）農林水産省農蚕園芸局普及教育課[12]。

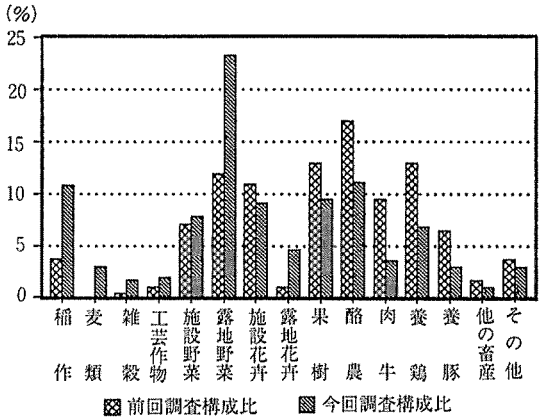

図2　新規参入農業者の主要作目
資料）農林水産省農蚕園芸局普及教育課[12]。
注）前回調査は1人1作目の回答だが，今回調査は240人の重複回答なので，のべ合計を100%にして構成比を算出した。主要作目だが第2の地位にある場合，その作目は前回調査ではでてこないことになる。露地野菜の急増はそれによる影響を差し引いて考える必要があろう。

最後の点については就農動機の変化が参考になる。表1は就農動機を比較したものだが，「特定の農業経営（酪農，肉用牛，花きなど）をやりたい。」という，いわば「事業志向」的動機のポイントが半分に減少し，かわりに「有機農業，無農薬農業がやりたい。」，「自然が好き。自然の中で生活したい。都会がきらい。ゆとりある生活をしたい。自給自足の生活をしたい。」という，「生活志向」的動機のポイントがそれぞれ2倍近くに増加している。

表1 就農動機（重複回答）

	前回調査	今回調査	
	構成比	構成比	実数
	%	%	
• 農業に興味がある。農業がやりたい。農業には夢，将来性，自由がある。	32	31.3	175
• 特定の農業経営（酪農，肉用牛，花きなど）をやりたい。	22	11.1	62
• 有機農業，無農薬農業がやりたい。	7	13.0	73
• 就農前に農業関係の仕事をしており，その経験を生かしたい。独立して自分の経験をしたい。	8	8.8	49
• 自然が好き。自然の中で生活したい。都会がきらい。ゆとりある生活をしたい。自給自足の生活をしたい。	12	20.7	116
• 就農前の職業がよくなかった。転職したかった。	9	3.9	22
• 定年退職後の職業として。老後の生きがい。	4	2.7	15
• その他（子供の教育。健康のため。他人からのすすめ。家庭の事情。不明。等）	6	4.8	27
• その他	—	3.8	21
のべ合計	100	100.0	560

資料） 農林水産省農蚕園芸局普及教育課[12]。
注） 前回調査は構成比以外不明なので，今回調査についても，のべ合計を100%とし構成比で比較した。

新規参入者の概要に関する以上の簡単な考察をまとめると次のようになる。一口に新規参入農業者といってもいろいろな場合があるが，「担い手論」を背景として施策的に対象となっているのは，農業基盤をまったく新たに築いて自力で経営をおこなおうとする人たちを指している。それらの人たちは1980年以降でみるかぎり，年々およそ数十人単位で存在しており，増減はみられるものの増加傾向にある。さらに就農動機については，「事業志向」的動機の減少と「生活志向」的動機の増加を指摘できる。

つまり，新規就農ガイド事業などの新規参入支援事業は，「担い手論」をベースにするかぎり「事業志向」型の参入者に関心が向かうが，実際にはそれにそぐわない「生活志向」型参入者が増えているのである。したがって，確かに新規参入者の円滑な就農，経営基盤の確立などへの支援は必要ではあるものの，それを問題にするだけでは事業自体が目標を見失うことになりかねない。現代農業に再考をせまるものとしての新規参入者という意義づけは，このように概要の検討からも確認できるのである。

3 7人の新規参入者たち

新規参入者を扱う文献の多くは，なんらかの視角から参入者のタイプ分けをしている。このことは新規参入者たちが多様な集団であり，単純に一般化して論じえないことを物語っている。そこで，ここで紹介する事例の特徴について最初に述べておきたい。

先に新規参入農業者の定義を①から⑤まであげたが，以下の事例は①および②に該当する人たちである。つまり新規参入者の核心をなす人たちであるが，なかには結果的あるいは暫定的に，⑤に近い生活形態となっている事例もある。他方，「事業志向」型―「生活志向」型の分類に即すると，以下の7人の中には「事業志向」的な意識をもつ事例が1例（E氏）含まれているものの，その他はすべて「生活志向」型に含めてよい事例である。そのため，資本集約的な畜産や施設園芸への参入者はまったく含まれていない。したがって，核心部分に限るとしても，なお新規参入者の一般像を論じるには無理があるが，参入者たちの生き方や考え方を拾いだし現代農業を再考しようという趣旨を考慮するとき，増えつつあるが等閑視されがちであった「生活志向」型参入者に焦点を

しぼることも意義あることだと思う。特徴の第3点として，就農して比較的間もない人たちであることもつけくわえておく。

各事例の内容はおおよそ，家族構成，就農にいたる経緯，現在の農業経営と生活，生産・生活をとりまく人間関係，農業という職業について，という順に記述していきたい。なお調査は，1992年2月から3月にかけて，筆者が直接に対象者に面接しておこなった。

(1)ツミなき生活へ—兵庫県宍粟郡千種町A氏—

A氏（33歳）の家族は，妻（35歳）と子供たち3人（6歳，3歳，0歳）の5人で，1989年の4月に千種町に移住した。就農前は東大阪市に住み，夫婦ともに中学校教師をしていた（夫：社会科，妻：英語）。

A氏は兵庫県明石市の生まれで，生家の職業は会社員である。加古川市内の高校を卒業，慶応大学へ進学し，卒業後すぐに中学校教師となる。妻は教師時代の同僚だが，結婚するときから，いずれ教師はやめると妻に話してあったという。妻は東大阪市の会社員の家庭に生まれ，市内の高校を卒業，関西大学に進み，卒業後教師となった。

A氏が教師をやめたのは，1988年の4月である。教師時代に脱サラ農民の本を読んだことがあるとはいえ，このときは就農するという目的はまだはっきりしていなかったという。しかし農業に関心があり，農業体験をしてみようかということで，同年5月から大阪府内の農家で農業研修をおこない始める。農業への関心の源泉は幼い頃に経験した田園風景だろうという。その後，研修の過程で農業をやるなら年をとってからではできないと感じ，研修を5か月できりあげて就農地を捜し始める。88年11月のことである。

生計の安定のために平飼いによる養鶏（「自然養鶏」）を取り入れたいと思っていたので[注9]，それが可能な場所を望んだと同時に，見晴らしや日当たりがよいということなども就農地選択時に考えたという。兵庫県農業会議にも相談したが，結局自然養鶏関係の人を通じて，今の就農地が決まった。最初は借家が見つからず町営住宅に住んだが，その後屋敷地を借入れ，自分で家を建てた。就農時の資金は600万円ほどであった。

現在の経営は，平飼いによる産卵鶏360羽（成鶏330，雛30）と，水田が2反，畑が1反である。鶏舎敷地をはじめ土地はすべて借地である。田畑はほとんど無農薬でつくっているが，おもに自給用である。養鶏については，同じ集落で自然養鶏をおこなっている人に技術的な援助を受けた。野菜などの栽培については本や雑誌を参考にしたり，近所の高齢者たちに聞いたりしている。

生計は卵の販売と，町内の中学生を集めて自宅でおこなっている家庭教師からの収入，および冬期におこなう水道工事などへのアルバイトで成り立っている。卵は1個40円の単価で，夫婦の大学時代や職場時代の友人たちに宅配便を利用して販売している。卵の売上から餌代をひいた収入は，月当りおよそ24万円前後，それに家庭教師の収入が月に7万円ほどである。

兵庫県有機農業研究会と自然養鶏会に入っており，あわせて年に2～3回程度これらの会合に出かける。近辺に住む新規参入者たちで集まって，炭を焼いたこともある。地区の出役や葬式の手伝いなどには欠かさず参加し，地元の消防団の一員でもある。一方，葬式や地区での供出金など，つきあいにかける費用は多いと感じている。

農業は最もツミの少ない職業ではないか，というのがA氏の考えであり，農業という職業を正当化するひとつの大きな根拠である。つまり農業は，公害や資源浪費，効率一点ばりの労働から，最も遠ざかることのできる職業だということだ。また，夫婦で教師をしていた頃の毎日の忙しさを振り返りながら，家族一緒の生活の大切さを強調する。都会と違って近所の人たちの干渉が気になることもあるが，都会にはもう戻りたくないというのが夫婦の一致した意見であった。

(2)"楽しみ"としての農業—兵庫県氷上郡市島町B氏—

B氏（30歳）は独身で，1989年に就農した。就農前は灘神戸生協（現コープこうべ）の職員であった。

B氏は広島県の出身で，生家の職業は会社員である。父親の海外転勤の関係で高校はブラジルのインターナショナルスクールを卒業した。ブラジルへ向かう前にはアメリカで半年間の語学研修の経験もある。卒業後，国際基督教大学社会科学科へ入学。卒業後すぐに灘神戸生協に就職した。

B氏の農業への関心は，ブラジル在住時に第三世界の，とくに貧困層の人々との出会いが発端だろうという。大学入学後に，東京から広島まで徒歩旅行をしたこともそれまでの生活を見直すきっかけとなった。具体的に農業がしたくなったのは大学2年の時だという。「ある日突然」思い立ったということだが，ある日突然農業がやり

たくなるという現象を，氏は「帰農症候群」と名付ける。

本当は農業をやりたかったので，生協への就職は妥協の産物であった。しかし，職員仲間との研究会で有機農産物の産消提携の実践例として市島町を知り，農業会議に照会したところ，運よく市島町に受け入れの用意があり，就農の運びとなった。就農を決意する段階では，市島町の産消提携に尽力してきた神戸大学Y助教授の影響も大きかったという。また，就農前には大阪府の農家で半年間ほど研修をおこなった。

住居は農家の離れを月2万円で間借りしている。当初は，農業委員会の斡旋で畑を1反，田を7畝借りていたが，調査時現在の経営情況は，畑3反，田1反，飼料作1反と平飼いの鶏が400羽である。飼料作を入れた輪作体系をとっている。鶏を始めたきっかけは，提携関係における卵不足であったが，野菜作りよりも楽で安定しているため，しだいに経営の中心になりつつある。野菜などの栽培については，町内の有機農業研究会のメンバーや本，近所の高齢者たちを参考にしている。養鶏については愛農会関係の養鶏農家が町内にいる。

現在の耕地のうち4反は購入済みである。就農時の資金は300万円ほどあったが，耕耘機やその他の機械，軽トラックなどの購入にまわったので，土地の購入については親や生協時代の知人たちからの借金でまかなった。購入理由は，借地の場合，肥えたときに土地を返してくれといわれることがあるからだという。また鶏舎の改築にあたっては，提携している消費者団体から100万円の無利子融資を受けている。

最近の収入内訳は，卵の販売による収入が月7～8万円，野菜からが月3万円（いずれも費用差引後），週3回教えている隣町の学習塾からの報酬が月5万円である。卵や野菜は，提携している消費者団体へ全量出荷している。鶏舎の改修に手をとられて野菜作りがおろそかになっているが，鶏舎が完成すれば，農業で現在の倍の収入は見込めるだろうということである。

有機農業研究会の県レベル，関西レベルの会合に出ており，途上国から農業研修生を受け入れる事業には，語学力を活かして通訳あるいは世話人として積極的に参加している。また，ふるさと創生基金を利用した町主導のいわゆる活性化塾（「未来塾」）や，地区の青年の集まりにも出ている。葬式などの地区の一般的なつきあいにも参加しているが，A氏と同様に，その関係の出費が多いと感じている。さらに町内に計画されたゴルフ場の建設反対運動では，中心的な活動をおこなった。

農業は産業ではなく食べ物作りなので，農産物は工業製品と同様の流通はできない，あるいは同様のコスト計算は成り立たない，というのがB氏の考えである。大学時代には自給的な生活を理想にしていたが，実際に就農してみると，たとえば肉を食べたいとか旅行をしたいなどという欲求を消し去ることができないことがわかった。だから，就農に際してあまり強い信念をもちすぎるのも，分裂を招くだけでよくないと考えている。

上の世代の人たちは，運動的に新規参入した人たちであれ，従来の農業から有機農業に転身した人であれ，農業を苦しいものとして捉えているようにみえる。自分は，そうではなく楽しみとしての農業を考えたいし，現在30歳代くらいの若い人たちの志向はそうなってきている，とB氏はいう。

(3)私は大丈夫だが……—兵庫県氷上郡市島町C氏—

C氏（31歳）も独身で，1991年4月に市島町に移住した。

神戸市で生まれ，小学校の時に岡山県倉敷市に移住する。岡山大学工学部を卒業後，機械プラントメーカーに就職し，阪神地域に居住しながら6年間勤務する。その後，和歌山県にある農業法人で3年間働き，独立した。

学生時代から自然保護などに関心はあったが，実際に農業につこうと考えるようになったのは，就職後のことである。バーレーン出張から帰ってきたとき，日本の緑に強く魅せられたことを記憶しているという。いろいろな理由から，農業がいちばんマシかな，と思って就農を考えたところはA氏に似ている。会社をやめる直接の原因は，造船不況による「肩たたき」の現場に接し，会社の冷たさを肌で感じたことであった。

和歌山県の農業法人を知ったのは，大阪市の中之島公園でおこなわれた農業関係の就職説明会[注10]を通じてである。農産加工に関する仕事の従事者を募集しているところもあったが，部分ではなく，農業に関する仕事全般がやれそうだったという理由で，その農業法人を選んだ。最終的には，そこで5～60頭いた肉牛の世話をまかされていたという。

独立時の希望地は兵庫県であった。C氏が神戸生まれで市内に親戚もあったこと，消費地として神戸を考えていたことなどが理由である。結局，B氏のところでふれ

たように，市島町は消費者と提携し販路が確立していたので，ここに決めた。

就農のための特別な資金はなかったという。トラクターや耕耘機，精米機などの機械をそろえたが，譲り受けたものもあり，全部で20万円強で入手できた。作業小屋風の一軒家の家賃は，電気水道込みで月１万円である。

借地による農地が全部で３反あまりあり，うち１反強には水稲を作付けた。農地はすべて無償の借り入れで，有機無農薬による栽培をおこなっている。昨秋に収穫した米は飯米と贈り物用のみであり，販売はしなかった。畑は昨年７月下旬から収穫物を提携消費者に出荷し始めたが，調査時点までの売上合計は10万円程度である。農業法人時代の知識を基本にし，本や町内の有機農業農家を参考にしながら農作業をしている。また，隣町にあるＢ氏と同じ学習塾で週７時間教えており，そこからの収入が月６万円ある。

参入して間もないこともあり，新規参入者関係の集まりに何度か出席し，体験を語ったこともある。他には有機農業関係の集まりにも参加する。地区の出役には欠かさず参加しているが，毎月開かれる地区の会合には，塾講師と重なって出ないことも多い。Ｂ氏が参加する町主導の活性化塾も，最初は出ていたが，学習塾の都合で疎遠になった。

農業は仕事を自分でコントロールできるところがよいという。消費者をはじめ，いろいろな人と知り合いになれるのも，氏の感じるよかった点である。将来は牛や鶏，果樹を経営にくわえた有畜複合農業をめざしている。運動にはあまり関わらずに自分の農業をしっかりさせていくことが現在の課題である。最近は野菜農家が減少しているようだがこの先どうなるのであろうか，私は自分で作っているから大丈夫だが……，と述べたのが印象的であった。

(4)人生計画としての就農―香川県大川郡寒川町Ｄ氏―

Ｄ氏（41歳）の家族は，妻（37歳）と子供たち（15歳，13歳，10歳，10歳）の６人で，1987年５月に正式に就農した。Ｄ氏の前職は国鉄職員である。JR 四国への変更時に退職したが，１年間の有給休暇期間があったので，実際には1986年から農業に専念している。

Ｄ氏は現在住む集落の出身で，３反程度を所有する農家の三男であった。地元の農業高校を卒業後，国鉄に就職したが，その頃から本当は農業をやりたいと思っていた。20年勤続すれば年金がつくので，その頃に退職して農業を始める計画をたてていたという。同じ集落出身の妻と結婚してしばらくは他町に住んでいたが，1977年に地元に家を建てて帰ってくる。そして減反用の土地を借りて，少しずつ農業を始める。そうして国鉄退職まで，兼業農家としての生活が続いた。

水田を１町３反，畑を５反作っており，平飼いの鶏が500羽いる。農地についてはすべて借地で，反当り2.2万円の借地料を支払っている。水稲については耕耘や田植，収穫などの作業請負も，それぞれ 1.0～3.0 ha の規模でおこなっている。機械はトラクターが３台，コンバイン，軽トラック，２トントラックがそれぞれ１台，籾摺り機，乾燥機などがある。

自分で経営する田畑はほとんどが有機無農薬栽培である。帰郷後，当初は化学肥料や農薬を使うような農業をおこなっていたが，1981年に生まれた子供がアトピーだったということもあって，趣味の農業から始めたのだから化学肥料や農薬をなるべく使わないようにしようと考えたという。その頃は兼業していたので，技術は本などを参考にしながら，あせらずに自分の考えで身につけていった。

野菜や米のほとんどは，「かがわ土と自然の会」（事務所：高松市，会員200戸程度）という消費者グループに販売し，自らの運転するトラックで県内各地に散らばる会員の拠点に，週２日の配達をおこなう。農協から頼まれてしかたなく栽培しているタマネギは農協に出荷する。これについては無農薬ではない。鶏の餌として米ぬかが必要なため，近くのいちご農家と共同でコイン精米もおこなっている。

妻も農業を手伝い，それについては給料を出すかたちにしている。子供たちも機械作業を手伝うことがある。昨年の粗収入は1000万円を少し越したぐらいだという。将来は，山の方に土地を買って体験農場的な要素も含めた複合農場を作るか，あるいは農産加工の部門に手を広げていきたいという。

自然養鶏会の四国支部や全国有機農業研究会にも入っているが，前者とはやや疎遠になり，後者については県レベルの活動が少ないので，この関係の活動はほとんどない。そのかわり，地元出身ということもあって，町の農業者会議や農協，学校関係の役職につくなど，地域的活動の機会は多い。地元の小学校で農作業の指導もして

いる。

国鉄時代との違いは，夜勤や時間に追われた仕事からの解放という面もあったが，大きく違うのはつきあいの広がりである。国鉄時代は同僚だけのつきあいであったが，農業をしていると，自分から出ていく意志さえあれば，つきあいがどんどん広がるという。消費者グループ向けに割に合わない配送をおこなうのも，消費者と話をしたり生の意見を聞いたりという交流があるからだ。また，県や農業会議の人と知り合いにもなれる。テレビの取材も何度か受けた。

加工をして付加価値を高めたり，生産者の側が値決めをする発想に転換できたりすれば，農業は有望な産業になりうる。そういう意味で，農業はやればやるほど可能性のある産業である。さらに，特産品の開発などを通じで地域社会の発展のためにも役立ちたい，とD氏は語る。

(5)今がチャンス—香川県仲多度郡琴南町E氏—

E氏（40歳）の農地は琴南町にあるが，居宅は車で40分ほどの宇多津町にあり，毎日車で通う通勤農業である。妻（35歳）は看護婦をしており，子供は4人（13歳，12歳，10歳，8歳）ある。1990年の11月に農業を始めた。

E氏は坂出市内の漁家の出身である。長男でなかったこともあって，市内の中学を卒業後，川崎重工に就職し3年間訓練生として神戸で暮らす。その後，地元の工業地帯にある工場に戻り，約10年間働く。その間，通信教育で高校を卒業した。退職してしばらくは実家ののり養殖を手伝った後，魚市場の中の水産会社に就職し，そこで10数年間働いた。

魚市場をやめたのは職場でのトラブルが大きな原因だったという。セリを担当していたのでストレスもきつかった。もうサラリーマンはしたくないと思ったが，漁業は身近で見ていたせいか，獲るばかりで先行きが不安な気がした。他方，農業については担い手不足の話をマスコミ等で聞いていたので，今はよくないが先々よくなるだろうと考えていた。何かを始めるには年齢的に最後のチャンスだとも思っていたので，転職を決意した。

とはいうものの，具体的な作目や場所を考えていたわけではない。山あいの静かなところという希望があったぐらいである。今の場所は農業会議を通じて見つけた。農業会議は作目や候補地などをもう少し具体的に紹介してくれると思っていたが，少々期待はずれであったという。妻は就農に賛成しなかったので，移住はできず通勤農業となっている。妻の実家は愛媛県の農家なので，農業で食べられるはずがないと思っているのかもしれない。はじめのうちは妻といさかいになることもあったが，最近は何もいわなくなった，という。

特別な研修をせずに農業を始めたので，昨年は練習の意味もあってあまり土地を借りなかったが，今年からは1町2反の土地を借りて経営をおこなう予定である。借地料は1.5～1.9万円／反で，露地による野菜作が主である。昨年はキャベツやたまねぎ，ちんげん菜などを作り，粗収入は150万円であった。今年は粗収入600万円をめざして努力したいという。就農資金は300万円あり，機械装備に120万円ほどかかった。技術は普及所や地元農協の営農指導員の意見を聞いている。農薬を使いすぎることに抵抗感はあるが，無農薬にするつもりは今のところない。出荷は農協出荷と個人出荷の両方である。個人出荷は必ずしも積極的なものではなく，規格や品揃えが要求される農協出荷に対応できないからという意味が強い。

農業委員の誘いで，町内にある中核的農家の会に入っている。そのメンバーで視察旅行をすることもある。居住していないので，地元とのつきあいは年1回の用排水路掃除だけである。

農業は天候の関係で労働が必ずしも収入につながらないことがある。そういう意味で，職業として農業を選ぶことはかなり勇気が必要だと思う。担い手不足の情報から農業に飛び込んだが，実際にやってみると条件はきびしい。しかし，農業をしていると国や地域に役立つのではないかと思うし，この選択は正しかったと信じている。今は自活することが最大の目標である。経営が軌道にのって，農業で食べていけるようになれば，妻も移住を考えるのではないか。E氏はこのように語る。

(6)スーパーマーケット勤務からの生活転換—香川県香川郡塩江町F氏—

F氏（37歳）の家族は，妻（32歳）と子供1人（6歳）であり，1990年3月に家族ともども移住した。移住前は広島市内に住み，中堅スーパーマーケットに勤めていた。

F氏は広島市郊外（現在は佐伯区）のサラリーマン家庭に生まれ，市内の高校を卒業，広島修道大学人文学部に進学し，卒業後まず市内の本屋に2年間勤める。その後，スーパーに転職し約10年間勤めた後，1988年6月に退職した。1984年に結婚した妻は，下関市の公務員家庭

の出身である。高校を卒業後，広島市内で働いていたときにＦ氏と出会った。

農業への関心は，今にして思えば幼い頃，母の実家のみかん畑で遊んだことが発端かもしれないという。しかし，具体的に就農を考え始めたのは，スーパー勤務時代である。仕事がら食物の安全性などの問題に関心が出てきて，素性の知れぬものを食べるよりも自分で作った方がよいのではないかと考えるようになった。スーパーをやめたのは仕事が忙しすぎることもある。朝８時前に家をでて，帰りが夜12時をまわることも珍しくなかった。だから，就農の希望を親に打ち明けたときも，体の心配からその方がいいという反応であったという。妻も家族一緒に働けることを望んでいた。

スーパー退職後，最初は山口県内で場所探しをしたが，妻の友人が香川県で事業を始めるにあたって人手を捜していたので，とりあえず妻が就業しながら適地を探せると思い，1989年に香川県に移住し，高松市郊外に住んだ。就農のための準備資金はほとんどなかったので，副収入の機会の有無も就農地選択の大きな条件であった。

現在の場所は県農業会議の斡旋による。しかし就農前に，農業会議に勧められて県の農業大学で１年間の研修をおこなった。農家研修の道もあったが，有機無農薬による栽培を考えていたので，一般農家での研修は敬遠したという。住居については，運よく町所有の住宅を月1.5万円で借りることができた。

４反の農地を年５万円で借りて野菜作りをしている。昨年は種々の作物を試験的に作ってみたので，ほとんど販売するにいたらなかった。今の土地に移って１年間は妻が会社勤めを続け，その後の半年間はＦ氏が高松市にある自然食品店の手伝いをしていたが，最近の半年間はこれといった現金収入がない状態である。技術については，県で出している栽培方法の本や市販本，近所の高齢者たちから得ている。

本格的な販売は今春から始める予定である。方法は宅配と直売店を考えている。宅配は，広島市や下関市に住む夫婦の友人たち50数軒を対象にしている。直売店は，うまくいけば今年の夏ごろ，車で30分ほど離れた高松市内の近郊住宅地域で開業できる見込みである。この店では，自作の農産物のほかに，近くの高齢者たちがおもに自家用に作ってきた野菜なども集めて売りたいという。また，有機無農薬農業をおこなう県内の２名の生産者（うち１名は次に紹介するＧ氏）にも声をかけており，その人たちの農産物も扱いたいという。出店については，スーパー時代の知識を役立てている。

地域のつきあいには積極的である。ほとんどが働きに出ている同世代の人たちと知り合いになれたのは，子供の意義が大きいという。また，町の農業後継者クラブにも加入している。農業をすると会社にはないような人間関係のつながりが得られると感じている。

スーパー勤務だと退職後の生活が空白状態だが，農業だと動ける限り働き続けられるという意味で，将来の見える生活ができる，とＦ氏はいう。自分の労働が，そのまま食べ物のかたちで自分の生につながるのでわかりやすくていい，と妻はいう。思想を問うような有機無農薬農業もよいが，自分としてはそうした思想や信条と無関係なかたちで，農業をし，昔の八百屋のような直売店を運営していきたい，とＦ氏は語る。

(7)理念と実践―香川県綾歌郡国分寺町Ｇ氏―

Ｇ氏（44歳）もＥ氏と同じく通勤農業である。居宅は高松市内にあり，妻（42歳）と子供が２人（14歳，11歳）ある。上の子供は現在，三重県にあるヤマギシズム学園中等部に入っている。妻は高松市出身で特殊学校の教諭をしている。Ｇ氏は1987年６月に坂出市役所職員を退職し，農地探しに少々手間どった後，1990年２月に現在の農地がみつかった。

Ｇ氏は高松市内の文房具店の生まれで，市内の高校を卒業，法政大学工学部に進学した。７年後に卒業し，親の意向もあって坂出市の公務員になる。役所では一貫して都市計画課所属であった。

就農を考え始めたのは1980年頃である。よく本を読んでいたので，それ以前も食品添加物関係の本や代替エネルギー関係の本を読んでいたが，画期となったのは，福岡正信『自然農法』[16]と中島正『自然卵養鶏法』[12]の２冊で出会ったことである。また『現代農業』に載っていた庭先養鶏の話も印象に残っている。一方，その頃に家を建て，やや本格的に家庭菜園を始めた。

こうしたことが総合して，しだいに就農の決意が高まってきた。就農の壁は具体的には３つあったという。第１は収入の問題，第２は役所をやめて農業をするときの世間体の問題，第３は体力的な問題，である。第１，第２の問題は，とくに，1984年にヤマギシズムの特別講習研鑽会（７泊の合宿研修）に参加して決心がついたと

いう。ヤマギシズムの農業を学びたいと思って特講に参加したが，結果的にこれがG氏の生き方を大きく左右することになる。最後まで残ったのは体力の問題である。しかし，農作業はしんどいけれども楽しいと思ったときに，就農の決心がついた。妻は黙認したが，収入が半分になることがやや不満であった。

退職直後は，すでに買っておいた山間の休耕地で農作業をしていた。しかし，経験もなく土地条件も悪かったので，農業会議を通じて，より近くて便利な現在の農地を探した。農地は2カ所に別れ，合計4反，借地料は年2.5万円／反である。資金は特別に準備していなかったが，耕耘機などは退職時にそろえた。

昨年の作目は野菜類のみである。販売は高松市内にある自然食品店におろした。この店はF氏の話にでてくる店のことで，この店を通じてG氏はF氏と出会った。昨年の粗収入は多い月で3万円程度である。それらの収入は種苗，資材費と同じくらいだったので，借地料や用水費などは妻の収入から補填したことになる。1年作ってみて，無農薬栽培の技術が多少わかってきた。この冬にはハウスの建てまわしもおこない，3棟で合計170坪になった。作るだけでは金のことばかりを考えるので自分で売ることも考えたい，という。しかし，今のような無農薬栽培をひとりの労働でおこなおうとすると，手取りで年100万円ぐらいの収入が限度ではないかともいう。技術はもっぱら本から得ている。

借地先でのつきあいは，野菜を作っている人がいないこともあってほとんどない。

今になって思えば，市役所の仕事はこなしていく仕事であって，将来を描けない仕事であった。それに比べると農業は自分で目標を立てて，それに向かって仕事ができる。自分の描いた方向に進んでいくところ，そこが農業の楽しさだとG氏は語る。

4 “小宇宙”としての農業生活

個々の参入者たちは個性に溢れており，安易な論評は避けるべきである。しかしB氏も指摘したことだが，とくに「生活志向」型参入者の農業に対する考え方には共通点も多い。仮説的考察であることをことわりつつ，以下にまとめてむすびとしたい。

最も顕著な共通点は，農業を生産だけでなく販売も含めて考えていることである。この傾向の直接的要因は，この型には無農薬栽培や鶏の平飼いが多いので，必然的に独自の流通方式が必要とされることであろう。市場流通では農産物の見栄えが問題となるし，安全性という価値も正当に認められがたいからである。しかし，この背後にはもう少し深い要因，すなわち自分の生活の成立ちの全体を理解し，把握したいという願望，が影響しているように思われる。このことは「生活志向」型の各事例にみられる自給の姿勢からも知られよう。個別的には「生きている全体がよくわかる生活」というF氏の妻の考え方や，A氏が自分で家を建てたことなどもその現われと考えられる。

こうしたこともあってか，参入者たちの生活は“自己完結”的な性格をもつように思われる。この自己完結性は閉鎖的・内向的という意味ではない。就農前の人間関係を利用して宅配をおこなったり，あるいはゴルフ場反対運動を主導したり，積極的に地域的活動をしたりする例がみられるように，参入者の活動はむしろ外に開かれている。つきあいが広がったという感想も多く聞かれた。しかしそれらの人間関係は，ある組織の一員としての関係というよりも，自己を中心としたネットワークとして展開しており，それぞれの関係を自分がコントロールしうるという意味で，自己完結的だと思われるのである[注11]。

このことはもちろん，就農地での生活経験が乏しいために，地域的組織ではなく，しかたなく自己の関係のネットワークに頼らざるをえないという面の反映でもある。しかしながら，伝統的農民たちの行動様式が「間人主義」的で相互依存的であるといわれるのに比べると，程度の差ではあれ，参入者はより「個人主義」的で自己中心的だといえる[注12]。彼らにとっては，地域的組織もコントロールされうべき対象のひとつなのである。今後，参入者が就農地域へ与えるインパクトというもうひとつの局面を考察する場合，これらの対照的な二つの行動様式がどのように影響しあうかが，重要な着眼点となろう。

次に，これもまた「生活志向」型の参入者に限ったことだが，傾向として思想や信条が後退しつつあることを指摘しておきたい。年齢層でいうと現在30歳代くらいの人たちは，それ以前の学生運動を経験した世代とは違って，公害や食べ物，環境などの問題意識から農業に目を向ける人が多い[注13]。その結果，食べ物などのモノに関

心の中心があり，組織的活動への関心は比較的弱いように思える。人間関係がネットワーク的な自己完結型になるのも，その現われといえようか。

それにしても参入後日が浅いとはいえ，農業収入のきわめて少ない事例が目につく。「作るだけでは金のことばかりを考えるので自分で売ることも考えたい」というG氏の発言を裏返すと，販売を手がけて消費者とのつながりなどもでき，農業を見る視野が広くなると，所得一辺倒の価値基準が揺らいでくるのかもしれない。しかし，事例の多くは地域とのつきあいにも積極的であり，現金を必要とする生活から遊離はできない。また，これから結婚や子供の成長をひかえている事例も多い。以上の事例が今後どのような生活史をつくるのか，見守っていく必要がある。

以上，少ない事例からではあるが，とくに「生活志向」型参入者について，その傾向の一端を示せたと思う。しかし，それらが現代農業に与えるインパクトを論じるには，違うタイプである「事業志向」型参入者に関する調査とともに，自家農業後継者との比較も必要である。一方，受け入れ地域の対応の側面も残された課題である。今回はそれらへとつなぐ事前のスケッチであると位置づけておきたい。

付記：登場する7人の参入者の方々には，面倒なインタビューに根気よくつきあっていただいた。また，新規参入に関する資料については全国農業会議所の山崎努氏に，調査事例の選定については兵庫県農業会議の谷口氏，香川県農業会議の村井氏にお世話になった。これらの皆様に厚く御礼申し上げます。

注

1) 新規学卒，Uターン就農者数は，農林水産省資料[13]より。

3) ひいては『WEEKLY プレイボーイ』にも，「明るい農村プロジェクト」と題して新規参入農業者の紹介と就農を勧誘する特集記事が載せられている(浅見[1])。

3) ただし，ここで田口のいう「経営理念（農業観）」は，農業だけで都市勤労者並みの生計を確保できることを目指す「職業としての農業観」と，経営の剰余を地代込み利潤として見なすようになる「企業としての農業観」の2分類（田口によると2段階）のみを指している。

4) たとえば，徳野[11]など。

5) 「担い手論」を否定するわけではない。そうした見地からの研究としては，たとえば松木・重富[15]があるが，実際の調査対象は北海道の酪農への新規参入を扱っており，「担い手論」として論じるには，まだまだ地域的作目的に限定が必要だろう。新規参入者の事例を扱った文献は，このほか注7にあげるもの以外にも，全国農業改良普及協会編[9]，三橋・山崎[18]，安藤[3]などがある。新規参入者自身が執筆したり編集したりした本も多いが，その紹介は，エコ・ライフ研究会編[5]が詳しい。さらに，各種農業関係雑誌にも新規参入者のルポが散見され始めた。

6) したがって，小稿でいう農業観概念は，先の田口の概念よりは広義であり，氏のいう「経営理念」の基本与件として経営展開に作用するものと位置づけられる。

7) 以下の分類については，品部[8]，および東[2]を参考にした。

8) 図では施設花きも減少しているが，回答者を100%とした回答率でみるとやや増加している。なお，畜産と果樹については，回答率でみても減少している。

9) 坂根[7]に同じ趣旨の記述がみられるので，その影響もあるかもしれない。坂根氏の発想については岸[6]による紹介がある。「自然養鶏」については，中島[12]を参照。

10) C氏の記憶では，「もうひとつの就職説明会」という名前であった。

11) 以上にのべた販売面の重視と人脈の活用は，徳野が，農業への新しい眼差しをもつ農業者から帰納的に導きだした特徴と共通している（徳野[11]）。

12) 「間人主義」と「個人主義」については，浜口[15]を，それらの農民行動への応用については，石田[4]を参照。参入者たちが個人主義的である背後には，必ずしも楽ではない農業生活を支える精神的支柱を個々の人たちがもっていることも大きいと思われる。言い方をかえれば，農業生活を続けるときに，これでいいんだと納得できるような理由を，各人がもっているように思う。その理由は人によって違うが，それが行動のひとつの判断基準となって，比較的個人主義的な行動様式が可能になっているように感じた。

13) あえて農業を職業として選択するという行為は，各人の個性をとりあえず除外すれば，各時代にお

ける農業の社会的な位置づけと，個々人のライフサイクルとの関数として描くことができるのではないかと構想している。なお，ライフサイクルの普遍化については，レビンソン[19]が興味深い。

要　　約

近年わが国では，自家農業後継者の数が激減している。こうした中で，後継する農業基盤を持たない新規参入農業者に焦点が集まりつつある。従来の研究はそれらの新規参入農業者を農業労働力の補充とみなす傾向があったが，小稿ではかれらの生活と農業観を明らかにしたいと思う。新規参入農業者の斬新な考えと生活様式は，伝統的な農業界に自らの固定観念の再考を迫りうると考えるからである。

7人の新規参入農業者への詳しいインタヴューを通じて，いくつかの共通の特徴が明らかとなった。ただし，事例のほとんどは「生活志向」型の参入者であって，「事業志向」型の参入者ではない。主な結果は以下の通りである。

第1に，彼らは生活の全局面を自らの手で把握したいという願望を持っている。彼らは農産物の生産だけでなく，販売も行なっている。もちろん，自給もしているし，中には自分で家を建てた者もいる。

第2に，彼らは社会集団よりも，むしろ個人的な社会的ネットワークを利用している。生産物を前職時代の友人や知人に販売する事例も2，3あった。

第3に，彼らは社会運動や厳格な信条に巻き込まれることをよしとしない。この点は，1970年代の新規参入農業者と今日のそれらとの相違点であるといえよう。

引 用 文 献

1) 浅見文夫．明るい農村プロジェクト，WEEKLY プレイボーイ，**27**(26): 38-43 (1992).
2) 東　廉．都市住民の「就農」，農林統計調査，**35** (10): 2-8 (1985).
3) 安藤義道．ザニューファーマー，明文書房，p 1-237 (1991).
4) 石田正昭．稲作経営の課題と展開方向，農林業問題研究，**93**: 15-23 (1988).
5) エコ・ライフ研究会編．新田舎暮しへの招待，楽游書房，p 1-206 (1986).
6) 岸　康彦．五反百姓　坂根修の“食える農業”，農林統計調査，**35** (10): 17-21 (1985).
7) 坂根　修．都市生活者のためのほどほどに食っていける百姓入門，清水弘文堂，p 1-206 (1985).
8) 品部義博．「新規参入」農業者の諸類型と就農実態，農政調査時報，**364**: 3-13 (1987).
9) 全国農業改良普及協会編．新規参入者就農事例集，全国農業改良普及協会，p 1-107 (1986).
10) 田口三樹夫．農業経営の主体論的課題，農業経営の構造的再編（鈴木福松編，明文書房），p 270-293 (1983).
11) 徳野貞雄．農業危機における農民の新たな対応，村落社会研究，**26**: 7-65 (1990).
12) 中島　正．自然卵養鶏法，農文協，p 1-250 (1980).
13) 農林水産省．新しい食料・農業・農村政策の方向，関係資料，p 24 (1992).
14) 農林水産省農蚕園芸局普及教育課．農業への新規参入に関する実態調査結果の概要（未定稿），p 1-40 (1989).
15) 浜口恵俊．「日本らしさ」の再発見，講談社学術文庫，p 1-339 (1988)．初出：日本経済新聞社 (1977).
16) 福岡正信．自然農法・わら一本の革命，柏樹社，p 1-252 (1975).
17) 松木洋一，重富真一．農業への新規参入者対策と農協がはたす役割・機能についての研究，協同組合奨励研究報告，**14**: 249-287 (1988).
18) 三橋伸夫，山崎光博．農業の新しい担い手の動向と将来展望に関する調査報告書，農村生活総合研究センター，p 1-134 (1987).
19) ダニエル・レビンソン（南博訳）．ライフサイクルの心理学（上・下），講談社学術文庫，p 1-341 (下)．原著：LEVINSON, D. J. The Seasons of a Man's Life (1978).